

海外インターンシッププログラム

派遣国・都市名	オーストラリア 西オーストラリア州 パース
研修先	西オーストラリア州・兵庫文化交流センター
プログラム実習期間	平成 29 年 8 月 22 日～平成 29 年 9 月 9 日
学部/研究科・学年	理学部 3 年

インターンシップ就業実習 報告書

西オーストラリア州・兵庫文化交流センターでの実習は、主に以下の 3 つであった。

1. School Visit
2. Japanese Language Conversation Course
3. Chatter Box

これらについて個別に報告することとする。

1. School Visit

School Visit とは、地元の学生が日本文化を体験するためにセンターを訪れるものである。センターは、館内にある展示物の紹介とともに、書道やクイズなどの参加できるイベントを行っている。

インターン期間中、小学校から 2 回 (8/22, 9/5)、高校から 1 回 (8/23) 訪問があった。

8 月 22 日、23 日の School Visit では、和室の紹介と書道体験を行った。センター内には和室があり、こたつや琴などが並べられている。日本人にとっては見慣れているものだが、オーストラリアで生まれ育った学生には目新しいものばかりだった。たたみが何でできているのか、ふすまと障子はどんな違いがあるのか、床の間にはどんな意味があるのか。一つ一つを英語で説明するのは易しいことではなかった。一方で、実際にこたつに入ってみたり、琴を鳴らしてみたりすると、言葉より早く、その魅力を感じてもらえたように思う。書道体験では、筆の持ち方や墨の扱いなどを知るだけでなく、漢字を書いてみるという体験に意味があるようだった。実際、「川」や「森」などを嬉しそうに書いている生徒の姿を見た。さらに、消しゴムでつくった手製のはんこは好評で、早く押したいとせがまれることが多くあった。

9 月 5 日の School Visit は「兵庫県に行こう」をテーマとする調べ学習だった。兵庫県の観光地について資料をもとに調べ、PR ポスターをつくった。導入の場面において、簡単な日本語の会話をしたり、ひらがなを見つけるゲームをしたりするなど、小学生に楽しんでもらう工夫がされていた。ポスターには異なる 2 つの動詞(「食べる」「行く」など)を使わなくてはならないなどの条件があり、小学生は質問をしながら協力してポスターを描いていた。完成したポスターは各チームの色がでたものばかりで、見ていてもおもしろかった。

2. Japanese Language Conversation Course

Japanese Language Conversation Course は、日本語を学びたい大人向けの日本語教室である。毎週木曜日と土曜日の午前中に行われている。10 時台が上級者向けクラス、11 時台が初級者向けクラスであった。

各クラスは挨拶や日付の確認などの易しい導入から始まり、対話を中心として1回1つの表現を学ぶ。上級者クラスでは発言を求められることが多い。昨日何をしたかを話したり、伝言ゲームをしたりするなど、聞いて話すことを大切にしているのだと感じた。初級クラスも日本語で進められ、ひらがなやカタカナに慣れるように配慮された内容になっていた。

クラスには様々な年代の人が参加していた。だれもが真面目にメモを取り、かつ、クラスを楽しんでいた。受講者は疑問を抱いたらすぐに辞書を引いたり質問をしたりする。私は受講者の様子を見ながら声掛けをしていた。新しい単語や表現から微妙なニュアンスの違いまで、英語で説明することは私にとって新鮮だった。そして、納得した顔が見れる喜びはとても大きかった。

3. Chatter Box

毎週土曜日の午後には Chatter Box が開かれている。日本語を学んでいる人とオーストラリアで暮らしている日本人がおしゃべりをするというものである。30~40人ほどが集まる Chatter Box の時間はセンターが活気で満ちている。あるところでは日本語が聞こえ、またあるところでは英語が聞こえる。日本語を勉強している人もいるし、世間話をしている人もいる。具体的なテーマがなくとも、すぐに盛り上がってしまう。

インターン最終日(9/9)には、インターン生がプレゼンを行った。

フライヤーをつくることからインターン生2人で進め、時間をかけてスライドや原稿を書いた。センターの方々には何度も目を通していただき、また数多く助言をしていただいた。出来上がったプレゼンは、各々の個性が出たものになったと思う。

当日私はパースでの生活やインターンのことを話したのち、日本の国技としての相撲を紹介した。試合の動画を用いたり、折り紙で力士を折ったりしたことで、聞く人が飽きないように工夫した。もう1人はお弁当について、道具やキャラ弁を紹介した。彼女はインターンの前から紙粘土でおにぎりなどを作っており、それを使ったお弁当詰め体験は好評だった。1時間にわたるプレゼンに対して、お褒めの言葉を多くの方からいただいたことは忘れられない経験となった。

インターン期間に出会った方々から「もっといけばいいのに」「11月に神戸で会おう」などと言っていた。これらは、出会ったすべての人と楽しい時間を過ごすという私の目標が形になったものだと受け止めている。インターン生として果たせた役割は決して大きくないが、日本に少しでも興味を持ってもらい、日本について1つでも新しい発見があれば幸いに思う。

感想および意見

インターン期間中に感じたことを以下の4点にまとめる。

1. オーストラリアの日本語
2. 初めてのオーギー、初めてのホームステイ
3. どうして兵庫文化交流センターなのか？

1. オーストラリアの日本語

センターにおける日本語教室で感じたことがある。学びたいと思う気持ちが大切だということと、外国語だって楽しく学んだらいいということの2つだ。

動機は様々であれ、日本語教室に来られる方々はやる気を持っていた。クラスが始まる前に、私を見つけて話しかけてくださる方がいた。もちろん日本語の話し相手として。使えるようになりたいという意志が感じられた。クラス中には知らない単語を調べたりメモを取ったりする姿を目にした。伝えたいことが先にあるのだ。だから上手くいかないときに新しい表現を得ようとする。

それと同時に、日本語を楽しんでいるのだとも実感した。ひらがなやカタカナが書かれたカードを組み合わせて単語を作ったり、絵を見てお話を創作したりしているとき、クラスは笑顔でいっぱいだった。上手くいったときはお互いを褒め合い、上手くいなくても誰かが助けてくれる。チャレンジできる環境だからこそ、のびのびと学ぶことができる。

そもそも、オーストラリアでは他言語の教育が盛んである。インターン初日、ホストマザーの招待で私はある小学校に行った。その日歌の発表会が開かれていた。驚いたのは、英語の歌が1つも出てこないことである。イタリア語、アフリカーンス語、日本語、…と、小学生から高校生まで(1st grade ~ 12th grade) が歌や踊りを披露していた。「あの子たちは私の生徒なの。」小学校の日本語教員であるホストマザーが嬉しそうに教えてくれた。

2. 初めてのオーギー、初めてのホームステイ

ホストファミリーとの生活は、とても刺激的だった。その一端を紹介したい。

ホストファミリーには2人子どもがいて、それはそれは元気だった。一緒にボードゲームをしたり外で秘密基地をつくったりと、常に遊び続けたように思う。小学校の運動会があったとき、見に来てほしいと言ってくれたことが忘れられない。一方で、子どもは早口で話すので注意が必要である。

キングスパークでお散歩をしたときは、ホストマザーにたくさんのワイルドフラワーを教えていただいた。小さな花がたくさん集まったものや動物の顔に見えるものなど、たくさんの花が咲き始めていた。いい天気にも恵まれたこともあり、春の訪れを感じられる素敵な場所だった。

日曜日の朝にはキリスト教会にお供した。日曜礼拝のことをあまり知らなかったため、驚くことがたくさんあった。子ども用のアクティビティが用意されていること。聖書を読むだけでなく合唱もすること。礼拝が終わったら、見ず知らずの人た

ちとおしゃべりを楽しむこと。(知り合いでない人ともすぐに話し始めるのは、オーストラリア人の性格らしい) 聖書に関する難しいところは、ホストファザーが適宜説明してくださった。とても優しく、お茶目なパパだった。

そんなホストファザーと一緒に、フットボールを見に行く機会があった。通称 footy である。オーストラリアのフットボールは独特だった。もちろんサッカーとは違い、また、アメフトとも少し異なる。ホストファザーにルールを教えていただき、どこが見どころなのか分かるまでになった。地元チームのスワンズが勝った時には、チームソングを歌って喜んだ。

3. どうして兵庫文化交流センターなのか？

西オーストラリア州・兵庫文化交流センターでのインターンを通して、得られたものは数多くある。オーストラリアで暮らしたこと、オーストラリアの異文化教育に触れたこと、日本語を学ぶ人たちと日本語および英語で話したこと、そして英語話者に英語でプレゼンをしたこと。海外旅行とも語学留学とも異なるこの経験は貴重だと思う。

加えてサポートが手厚いことも述べておきたい。インターン期間前から大学で研修があり、ビジネス英語について、ビジネスマナーについてなどを知る機会をいただいた。インターン期間中は主に英語で過ごすことになるものの、センターの職員の方々は日本語が堪能なため、困ったときには日本語で伝えることができる。

本インターンでできないのは、日本の企業について知ること、野球の試合に行くこと、そして日本のテレビ番組を見ることなどである。それらを納得するならば、おすすめしたいチャンスである。

以上のように、とても魅力あふれるインターンだった。しかし、残念なことに、大学内における本インターンの認知度は比較的低い。もったいない。来年度も同様の機会が与えられるのであれば、より多くの学生に知ってもらい、夏休みにしたいことの1つとしてほしいと願っている。



